

自慰を主訴とする男児の治療過程

——遊戯療法を中心として——

吉川 政夫
権平 俊子

自慰を主訴とする男児の治療過程
遊戯療法を中心として

自慰を主訴とする男児の治療過程
遊戯療法を中心として

I はじめに

子どものすべての問題行動のなかで、両親や教師を非常に動揺させ、心配させるものに性的な問題行動がある。ごく普通にみられる青年期の自慰と比べて、ここで報告する事例のように、それが比較的少ない幼児の場合、自慰という性的な問題行動は実際よりも深刻に受けとられがちである。この事例は、自慰を主訴とする男児T(男児)5歳0か月(治療開始時)の事例である。性的な問題行動は、それ自体を深刻なものともみずよりも、人格的不適応の一つの表現であると考えらるべきであろう。一般に、対人関係の障害によって生じた不安や心理的緊張があると、それらを緩和し、まぎらわすために、子どもは指しゃぶりなどの身体玩弄癖と同様に、自慰をすることがあると言われる。それが特に幼児に認められる場合は、不安定で不快な親子関係や家庭内の緊張が原因していることが多い。それゆえ、この問題を解決するには、子どもの治療とともに親の理解と協力も欠くことのできない条件である。ここで述べるのは、表面的には引越しが直接的な引き金となって自慰を始めた男児の問題行動の治療についてである。本児は、一連の神経性習癖と同時に粗暴な行為も問題としてもらっていたが、治療過程の中では、激しい攻撃性を示した。その攻撃性の爆発と鎮静化に伴って、本児の行動は、「否定」、「破壊」、「分解」から「肯定」、「建設」、「結合」へと変化発展していったように思う。それゆえ、そのプロセスに焦点を絞るようにしながら治療過程を検討してみたい。

II 事例

1. 治療対象児：T(男児)5歳0か月(治療開始時)
2. 本児の主訴および状態：自慰、頻尿、粗暴な行動をとる。
3. 家族：両親、妹(2歳)、Tの4人家族。両親はいわゆる一流大学卒である。父親は銀行員で、Tのこどをかわいがらでおり、子どものことを叱りたくないと思

知能検査でI.Q. 127(4歳11か月時点)。
治療開始は昭和55年5月初旬であったが、そのほぼ4か月前の1月に、父親の仕事の関係で関西から東京に引越してきてからしばらくして、Tの自慰が始まった。2月頃から部屋の隅に行きでする。たたみの上にうつ伏せになってこすりつけ、興奮して真っ赤な顔になる。母親は、「はずかしいが止めよう」と言うけれども、転動してきて遊び友達がいなくなつてつまらないためが2月、3月中は1日10回くらいした。4月に入り、幼稚園に行き出してからは1日1、2回に減ってきた。指しゃぶりは1歳半頃止めて、その後は夜中ときたまするくらいであったが、自慰と同時に、口に物を入れたり、なめたりするくせも出てきた。その他、緊張すると頻尿になるなど、現在の所へ引越してから一連の神経性習癖を示し始めた。以前から、少しでも気に入らないことがあると粗暴な行動をとる傾向があったが、最近それがひどくなってきた。たとえば、母親がTの気に入ったテレビを消した時、自分が遊び過ぎて時間が遅くなってしまいテレビが見られなからた時など、T気に入らないことがあると2歳の妹にやつあたりして乱暴にいじめる。母親の言葉を借りれば、Tはカシシヤクが強く、負けず嫌いである。負けると相手にかみついたり、やられるとくやしがるて友達にしかえしをする。自分以外の者がかわいそうだ絶対言わず、他者に対する思いやりのない。乱暴で攻撃的な行動をとる反面、大人しく、積極性に欠け、自分から進んで友達の中に入ってゆけず、子どもらしい素直さ、明るさに乏しいという。Tは絵をかくこと、砂遊び、友達といっしょに遊んでいることがすきである。夜は8時半頃になるとバタバタとすぐ寝つく。家族は両親、妹(2歳)、Tの4人家族。両親はいわゆる一流大学卒である。父親は銀行員で、Tのこどをかわいがらでおり、子どものことを叱りたくないと思

てたり、気をそらせてしまう。母親は叱ってちゃんと悪いことを解らせたのだが、父親はその空気を強く保ちたい。でも、父親は、年齢が進めば自然に解ってくるといって、Tに腹をたてたことがない。そのために、Tを叱るのは母親の役目となり、結果として、母親はTの反撥をかい、「おこるのはやめてくれ」といわれる。子どもにはやさしく甘い父親ではあるが、母親はTの父親である夫を尊敬し、多少意見がちがうことがあっても根本的な生活信条や考え方にずれがなく、夫婦の間はうまくいっている。

Tの家庭の生活態度は、一言で表現すれば、現代の一般家庭での子どもの扱い方とはかけ離れていた。両親ともテレビを見ない。テレビはまだ白黒テレビで、Tはもっと見たいと言うけれども、制限をして毎日2つしか見せないという。外食はほとんどさせない。外出の時はお弁当を持って出かけ、お菓子も家で手作りする。デパートには子どもをつれていかない。ブロッコなどの教育的なものを買ひ与え、くだらないおもちゃは買わない。

それぞれの理由を聞けばなるほどと納得できる。たとえば、お菓子は家で作れば、どんな材料でつくったかはらきりして、よい物を安くつくれる。デパートは空気が悪くて子どもを連れていく必要のないところと母親は言う。父親もそのような生活態度を積極的に支持する意見をもっており、母親は、自分たち夫婦が疑いもなく信ずる養育方針で子どもたちをきっちり育ててきた。母親の話の聞いていると、それはみごとと表現するほかないほど筋が通っていてすぎがない。しかし、あまりに徹底し粹にはまりすぎているためか、生活の中に自由な雰囲気を感じられない。恐らく、Tもそのような生活を息づまる思いで過ごしてきたのであろう。Tが3歳になる直前に妹が生まれた。妹を生む時、母親はTをつれて実家に帰った。妹は手がかからないでよい子だと母親は言う。カウンセリング中、当時2歳の妹は大人しく二人で遊び、ねむくなって少しくずると、母親は抱いて寝かしてつけていた。家では、Tを年上だからと何かにつけて我慢をさせてきた。Tは母親に対して、「妹の方をかわいがる」とか「妹がかわいいだろう」と言う。Tはよく話を聞いていて、よく話を聞いていていい言葉使いや落ち着いた物腰から、母親は、理性的でしっかりした女性という印象をうけるが、子どもが気がねなく十分に甘えられるような雰囲気が少ない。よい母親であらねばという構えからか、子どもに対する愛情は十分にあるのだけれども、それを素直にあらわさないで、母親の役割を賢く演じている感じである。

自慰を起こした動機について、母親は次のように述べている。補正を願自

関西では外遊びをすることができ、友達も多かったが、転動してきて遊び友達がなくなってつまらなくなった。また、妹が活動するようになったら、嫉妬し、「自分の方がかわいくないのか」といったりして、妹をいじめようになった。妹はまだ小さいので、どうしてもかばってしまったのがいけなかったと思う。これらのことが重なって淋しくなり、それをまぎらわすために自慰を行なったのではないのでしょうかと述べている。

4. 治療：Tの情緒障害の治療は、昭和55年5月から12月までの8か月間にわたって行なわれた。本児の治療は、吉川が担当し、隔週に行なわれた母親とのカウンセリングは権平が担当した。

III 治療過程

第1回：Tは治療者の誘いに応じてすぐプレイルームに入室する。その時の、口をとがらせ少しおどされた態度のTの様子が印象的であった。入室してしばらくの間、ポケットに両手を突っ込み、ドアの前に突っ立って部屋中を眺めわたしている。半ズボンの下に見える太ももやふくらはぎの筋肉は、同年齢の子どもに比べてよく発達しひきしまっている。体は格別大きいほうではないが、体全体がたくましく、体内には、野性的なエネルギーと俊敏な動きが隠されている感じである。しかし、おどらざぶくれたおどりとゆくり部屋を眺め回している眠そうな目からは、Tのいかにも「つまらない」という感じが治療者に伝わってくる。べじっとしているので、治療者が「それじゃ、この部屋にどんなおもちゃがあるかみてみようか?」と言って、ロッカーに入っているおもちゃを2、3紹介しはじめると、ファミリーゲーム(注：スマートボールに似たゲーム)をとって、床に座りこんだ。両足を開けてその真ん中にファミリーゲームを置き、台から玉をとり出し、穴に1つずつ入れながらはじき出しはじめた。しばらく1人でゲームをしている。入室してからずっと無言である。

治療者が「いくつ入ったかな?」とか「3つ入ったね」と言っても、無視するかのよう黙って玉を入れてはじき出す遊びを続けている。Tが玉をポンとはじく時、治療者が「バキューン」と大きな声を出したら、Tは部屋に入ってから始めて治療者の顔を見て、目を笑った。治療者が何度か、「バキューン」「バキューン」と言っていると、Tもまねをして「バキューン」と大きな声で

やり出した。それがはじめて発したTの声だった。

ファミリーゲームに飽きると、立ち上がっておもちゃのロッカーに行き、自分でレゴのいっぱい入っている箱をとり出して来て遊び始めた。レゴの部品の中に、Tが見たことのない新しい部品を見つけると、手にとって、「なんだ、コリャ」「なんジャ」「と叫ぶ。Tは、そばで見ている治療者に話しかけるでもなく、ひとりて勝手なことを言いながらレゴを組み立てていた。その時の言葉が一風変わっていて、聞いていておかしかったり、驚かされたりした。「オイ、チュ」と言いながら小さなレゴを親指と人さし指でつまみ上げたかと思うと、次には大きなドスの効いた太い声で、「こんなん、くうつかないじゃネエカヨ」と口をとがらせるし、「だめだよ、これは、ウン」とひとりごとでも言う。レゴを組み立てながらときどき、治療者を見て笑ったりするけれども、ほとんどおもちゃを相手に過ごしていた。

終わりの時間になって退室し、母親のいる部屋に行く時も、ドタドタとふてくされたように廊下を歩いていた。母親のところに戻って、母親から「終わったの？」とやさしく言われても、表情を変えず、「オワッダゾ」というような顔つきをするだけで無言である。

全体を通して、Tは何となく投げやりなふてくされた態度をとっていたが、そのような態度をとったのは、確かに緊張のせいもあらた（接していて気づいたことであるが、Tは緊張を投げやりなふてくされた仕草によって表現しているようだった）。じかしながら、投げやりなふてくされた様子には、日頃から自分の気持ちが満たされていないTの「つまんない」感じがよくあらわれていた。ときどき使っていた幼児音（サ行→シャ行、ツ→チュ）、とドスの効いた「粗暴な言葉」は、それぞれ、「甘えたい、誰かに自分をしっかり受けとめてもらいたい」Tの欲求と、その欲求を受け入れて満たしてもらえないことに対する抗議と怒りの気持ちをあらわしているかのようになり、治療者には聞こえた。

第2回、治療者がおもちゃのロッカーを開けると、Tは、家からもってきたカモンライダーを治療者に見せてくれる。

プレイルームにある箱庭のおもちゃを手にとって、「なんだコリャ」「このテレビ、おかしいの」とかいいながら眺めている。おもちゃの中のカモンライダーの首のハンカチがとれていたのを、「とれてる」と言って結びつけた。

治療者が、砂箱を指さして、「あそこに何かつくってみるか」と言ってもさほど意欲的ではない。Tは、箱庭用のいろいろなおもちゃをもてあそびながら、「ボク、

カモンライダーの映画とカモンライダーをおとうさんに見につれていらしてもらったんだよ。おとうさん、映画見たから、もうテレビ見なくてもいいだろうと言うんだよ。だけどボクはテレビも見ちゃうんだよ。おとうさんね、映画見に行くの、夜寝てるときに考えたんだよ」と熱心に話す。

治療者が、砂箱に大木を置き、ライオンをその横に置いて、「ガオー」と言うと、Tは、「おんなじなま」と言っ、トラ、ヒョウ、ライオンなどをその近くに置いた。「強いのだれかな」ときくと、「ゾウをとって、「強いよ」と言う。治療者がキングゴングみたいなゴリラをとると、「ベエー、強そう」と感心したように言っ、治療者の手からとってゾウをいらしまに砂の上に置く。怪人とゴジラを置くと、Tは、「カモンライダーが強いぞ」と言っ、2人のカモンライダーをとった。Tはおもちゃのロッカーからピストルをもってきて、ダダダダと治療者を撃つ。治療者もピストルを急いでとって反撃する。治療者の近くまで撃ちながらやってきて、治療者のオンリに銃口をあててダダダダと撃つ。治療者はたまらずひっくり返った。Tは、大変に満足そうに喜ぶ。何度となくそれを繰り返し、そのうち、車に乗って互いに撃ちあうこをする。運搬車にTを乗せて走り、Tはその上から、砂場の怪獣、猛獣どもを近づいたときにバーンと撃つ。

Tも治療者も汗だく。Tは一度もやられない。ひらくり返るのはいつも治療者。Tは今度、日本刀を持ち出して来た。治療者も負けずに日本刀をとり急ぎ、チャンバラが始まった。Tは、おもいきり刀を振り回すので、切られると痛い。治療者は何度もひらくり返る。退室する前にTは風船を足でおもいきりバーンと割った。よく遊び、よく動くが、その中には強い攻撃性が満ちていた。

第3回、治療者がおもちゃのロッカーを開けると、Tはチャンバラをする。ものすごい勢いで刀を振り回して治療者に切りかかり、オンリや足などが切られて、治療者はたまらずドッと倒れた。突に痛い。そんなことにはおかないしに、懸命になって切りかからてくる。Tはチャンバラをかなり続けたあと、箱庭をはじめ、カモンライダーを2人、砂の中に埋める。そして、掘り出し、又埋める。そこにゴリラ、家、人間が登場するが、意味のある筋はない。最後は、「ウンチ」と言っ部屋を出る。

第4回、治療者がおもちゃのロッカーを開けると、Tは入室するなり、空気でふくらませたドラエモンのような大きな人形に何度かキックとパンチをくらわせた。粘土をつかう「床屋さん」の遊びで、おとうさん人形

に粘土をかぶせて、「こらしめてやる、オンシリからヘビを入れてやる」と攻撃的である。おかあさん人形を坊主にしたので、「おかあさん、悲しいはずかしくて外に出られない」と治療者が言うとき、「いいよ、いいよ、もっとやろてやるよ」と何度も頭の毛をかりとる。しばらくして、Tはいつのまにか治療者の膝の上に乗ってきて、ニコニコしながら遊んでいた。床屋さん遊びが気に入った様子である。

それまで遊びに使っていた粘土をつかんで、空気人形のドラエモンとトライダーG7に向かって投げつける。治療者にも大きな固まりを投げるので、Tを高く抱きあげると、キャーキャー笑いながら、「おろせー」と大声を出した。下に降ろすと、Tは刀をとってきてブンブン振り回す。治療者は大きな空気人形の背後に隠れながら立ち向かったが、何度かぶたれて床に倒れた。

最後に、箱庭の砂で山をつくり、その中にアマゾンライオンを逆さにして埋め、つづけて箱庭用の人形も何人か埋める。自分で埋めたアマゾンライオンを掘り出し、次に、「強そうだなー」といながらゴリラを埋めて、又掘り出した。

行動は、攻撃的であると同時に、遊んでいるうちに治療者にべたっと体を押しつけてきて、自然に膝の上に乗って遊ぶという「子どもらしい自然なたちの甘え」も示していた。幼似的な言語表現がときどき顔をのぞかせるのも、Tの甘えたいという欲求の一つのあらわれか。

第5回 部屋に入るなり、Tは、「今日は何して遊ぶんだよおー」と言う。治療者（何して遊ぼうかね？）「床屋さんはどこにあるんだよお」（ロッカーにあるよ）ロッカーから床屋さんを運んできて、箱を開けたが粘土がない。「粘土がねえなあ。粘土、どこにいったんだよお」（おもちゃのロッカーにはいっているよ）Tはしばらく探して粘土の箱をもって来る。蓋を開けると、前の時間の子が遊んだのか、自動車の形をした粘土が箱の中から出てきた。それを見つけて、「これどうやってつくるの？」ときく。その時の表情があどけなくてかわいい。治療者が粘土用の型を出してくると、Tはそれに粘土をつめて、いろいろな自動車、汽車、お菓子をつくる。治療者の膝の上に乗って、ずっと粘土の型はめ遊びを続ける。「ボクはお菓子やさん、あんたは？」（自動車屋さんだよ）

ドラエモンの人形の空気がぬけていたのを治療者がなおそうとするとき、Tは、「ボクもこれとおなじのもってる。おばあちゃんからもらったよ」という。治療者が口で吹いて空気を入れようとするとき、「どうしてそんな

のでいれるんだよ。ボクんちは、プールをふくらますのですよ、へんなの」とTに言われてしまった。

チャンバラをする。本気で刀を振り回して治療者を切る。痛いので、治療者も本気で応戦し、今回はTをつかまえ、床に押さえこんでお腹をくすぐったら、「まいった／＼まいった／＼」と笑いながら言うので押さえこみを止めた。

第6回

廊下では、パンチやキックを治療者に仕掛けてきたが、部屋に入ると、「今日はもう、そんなのしないよ」とTは言い、パンチやキックに応戦しようとした治療者は肩すかしをくらった。

粘土遊びをする。「ニコロポンプ」でスパゲティやおそばをつくる。粘土をこねて怪獣をつくる。二人で怪獣対怪獣のケンカをさせる。Tは、口が大きく裂けた怪獣をつかって、治療者の怪獣をのみこんでしまう。口以外はばきりした形がつくられていない場合が多く、怪獣の体の半分は巨大な口である。「オンシロ怪獣」「ウンチ怪獣」「オナラ怪獣」と名付けられた怪獣たちが活躍した。

以前よりも落ち着いて、ララストレードされた雰囲気はなくなってきた。攻撃性がすこしずつTの自我の中に取り込まれている感じである。チャンバラで刀を振り回すというように、今までは攻撃性をT自身が直接的に表現していたけれども、今回は、怪獣という媒介物を借りて、自己の攻撃性をあらわしていた。変化である。第7回～8回

レゴで自動車やロケットをつくる。ときどき、「どうやんのー、わかんないなー、モンセイやろて」と甘えた口調で言う。前回と同様に、粘土で怪獣をこしらえて治療者のつくったものとケンカさせる。「オチンチンをやらつけちゃうゾー、突きさしちゃうゾー、ソシキヤロ」と言いながら、怪獣のオンシリに棒を突きさす。また、怪獣のオネツに銃をつきつけて、穴を開けたりする行為が頻繁にあらわされ、「オンシリ」「オナラ」「ウンコロ」「シッコ」

「オチンチン」などの言葉が多用された。終了時刻間際に、治療者がTの背後からTをかかえ上げ、両脚を開かせて、わざと、「オンシロ、ゾー」とやると、結構乗ってきて、降ろすと、今度はTの方から、オンシリを治療者に向け、「オナラ、プー」とか「オンシロ、ベチャー」という格好をしてから喜々として立ち去った。

第9回～10回 「これなんだー、どうやって遊ぶんだー」と相変わらず

ずの声の調子で、おもちゃのマンションの部屋にイスやベッドを並べたり、エレベーターにお人形を乗せて上下させたりしている。そのあと、粘土を使って料理をつくる遊びをする。それが大変気に入ったらしく、魚やカニ、パン、ソーセージなど、いろいろな形をつくって大きなお皿にきれいに並べ、満足そうである。治療者にもその作業を手伝わせたためか、できあがった料理の半分を治療者に分けてくれた。食卓には男の子と女の子、おじいさんとおばあさんが座り、台所ではおかあさんが料理をつくり、丁度、そこにおとうさんがおみやげを持って会社から帰ってきたところの情景が印刷してあるビニールクロスの上に、つくった料理のすべてをのせ、絵にかいてある人物みんなに食べさせた。Tは、つくった料理をナイフでみんな切った。おもちゃのパワーシャベルがそこにやってきて、料理をすくい上げ、パワーシャベルに乗っていた人形が食べた。

マンションの住人をパワーシャベルでやっつけたりするような攻撃行動は出ているけれども、以前に比べて、破壊的な行動は影をひそめている。

セラピーが終わって母親のところに帰ると、母親にドサッとしなだれかかったり、母親の座っている横に寝ころんだりしていた。

第11回

夏休みのため、3週間ほど間が空いたあとのセラピーである。休みの間に、Tは、カメンライダーが空を飛んでいる絵をハガキに描いた空中見舞を治療者に送ってくれた。休み中元気で過ごしたかなと思いつつ、セラピー室に向かうと、廊下で「アアアア、アアアア」という大きな声がする。まるでターザンの叫び声そっくりである。声の主はいったい誰だろうと足を速めて行くと、治療者が来るのを待っていたTであった。長イスにひっくり返って声を張り上げていたのである。

壁にかかっている円盤的に玉を当てて得点を争うゲームをした。Tは、両手を使って得点のたし算を一生懸命にする。たし算は合っていたり、間違っていたりする。「得点を黒板に書く」と言ったが、数字は書けない。しかし、自分で書きたそうだったので、治療者が手をとって書かせた。そのあとは、治療者の書いた数字をまねして書いていた。

的は、10, 20, 30, 40の得点表示だらけだけれども、「たし算しやすいように0をとろうね」と治療者が提案して、0をとり、1, 2, 3, 4点で得点の計算をしていた。何度か互いに勝ったり負けたりしたあと、最終回に、治療者が合計で100点をとった。計算の方法からす

ると、0を1つとるので10点である。Tが黒板に10と書くかど見ていたら、1としか書かない。治療者が「10点だから、0もかかなくちゃいけないよ」と言うと、Tは、「0はとるんだから」と言って書かない。治療者が「100点だから、0をひとつとると10点だよ。だから10と書くんだよ」と説明すると、Tは、「泣きべそをかきそうに口をとがらせ、ホップをふくらませてジッとしている。治療者の説明した内容がわからず、ごまかされてると思ったのであろう。Tにしてみれば、0はすべて省くものと理解しているから、1.0の0も当然とり去り、1と書いた自分は正しいと考えていた。しかし、治療者から、それはちがうと指摘されたので、Tには心外だったのだろう。Tの年齢ではむずかしいルールだったので、0はすべて消すルールに従って、表示を1とした。その結果、Tが勝ち、不満な表情が柔らいできた。手足がバラバラになっていた人造人間に、手足をセロテープでつけ、人造人間の内部に水を入れて遊んでいた。治療者が「水を入れると生きるかもね」と言うと、Tは「人造人間だから生きっこないよ」と断定的に言う。人造人間で遊びながら、「ベチャンコ人間だ、へんなのよ」と言う。

第12回

セラピー室に入る時、治療者に向かって、「おまえ、きょうは何すんだよ」ときく。中に入ると、「ひとつ、いそうなところにカケフ、ふたつ、……にカケフ」とコマージュルを大声で歌いながら遊び出した。レゴ専用の小さな人形を扱いながら、「おまえ、ここに座んの、これを運転すんの、4人とも寝ちゃうんだよ」と言い、レゴのトラックに人形をのせたり、ねかせたりしている。ピストルと刀を武器にして、Tは治療者と真剣な勝負をした。刀がブンブンうなりをあげ、マシンガンがダダダッダーと火を吹いた。目は真剣そのもの、口元もキュッと結ばれていて、治療者にとってTは手強い小さな戦士であった。

最後に、空気人形を何度もなぐり、馬乗りになって人形のオシリの栓を歯で引きぬいた。そして、空気がぬけて人形がベチャンコになるまで、何度も何度も人形に馬乗りになりながら、Tは、「死ぬ、死んじゃえ」と繰り返して言っていた。夏休み後、再び攻撃性があらわになっている。

第13回

Tは廊下の長イスの上に寝そべっていた。治療者が行ってもすぐには起きず、母親に促されてやっと起き、しばらくしてからセラピー室に入った。何となく気だるそうである。

ロコビー室に入ってもまだそれが続き、おもちゃのロコビーの中を捜してレゴをもち出すが、あまりやる気ではなく、つぎに、正解のボタンを押すとビー玉が出てくるゲームをやり始めた。問題のカードを入れがえながらボタンを押していたが、ほとんどできる。できてビー玉が出てくると、「当たった」「こんなの簡単だ」「こんどはこれだ」といいながらやっている。治療者が、バットでボールを打ち、「野球やろうか？」と誘うと、Tは、「かってに一人でやられてる」となげやりに言い放つ。Tはドラエモンの絵書き歌を歌いながら、黒板にチョークでドラエモンを描きだした。お世辞にも上手な絵とは言えなからたので、そばで見ていた治療者が、「これはドラエモンのおじいさんかい？」とひやかすと、Tはニコッと笑ってもう一つ描く。治療者もドラエモンを描いた。Tは描くのを止めて、治療者のドラエモンを消した。治療者も、「ビビビビー」といいながらTの絵にチョークで光線ビームを発射した。治療者はデジマンを描く。Tが消す。又描く。又消す。こんどは、「ビビビビー」といいながら、チョークをTのお腹にもらていった。Tは黒板消して治療者のお腹をボコと打つ。互いにそれを繰り返す。このあたりから、Tに元気が出てきた。

第14回

Tは刀をとりてきて武器にする。空気入りのあしたのジョー人形をおもいさきり何度も刀でたたく。治療者も「仲間がやられる」と言って参加。切り合い合戦が始められ、途中で、Tはスポンジの板を投げ、治療者はそれを刀でかわす。最後は取っ組み合いの戦い。治療者の武器はくすぐることで、Tは「キャーやめろ」と言う。やっつけられたりやらつけたりしたが、最後にTは、スポンジ板を治療者に投げつけ、「新幹線で逃げる」といって新幹線の電車に乗り、ドアのところに行くと終わりとする。

第14回 カニとロコビーのゲーム

金魚つりゲームとカニとりゲームをする。カニとりゲームは、ゲーム台の中央に岩があり、その下にカニが隠れたり、出て来たりして動くのをタイミングよく磁石つきのスプーンで捕える遊びである。カニたちが岩の下に入らなかなかなか出てこないとき、Tは手で岩をドンドンとおもいさきりたたいてカニを出そうとする。あまり勢よくたたいたためか、プラスチック製の岩はヒビが入り割れてしまった。

第15回

カニとりゲームに飽きてくると、カニを金魚すくいゲームの容器に入れ、金魚というまじりに金魚すくいを始めた。楽しそうである。なかなかすくえないときに、治療者が「へぼ、へぼだなあ」とひやかしても、Tはニ

ニコッと笑って気にもしない。しばらくすると、両手を使って金魚たちをつかまえていた。

治療者がビニールテープにプラスチックの金魚を並べてくっつけていると、それを見て、「オレにくれよ」と治療者の作ったものをとった。それをくるくると振り回してから、ロコビーに行き、突然、「オレの武器はこれだ！」と刀を天井に向けて高々と突き出した。そして、その刀で空気人形に切りつけた。金魚やカニのおもちゃが並べられている長いビニールテープを左手でつるし、右手に持った刀でパシッと切ると、金魚やカニが部屋中に飛び散った。壮烈な戦いにふさわしい、迫力ある幕開きであった。治療者がピストルを武器にすると、それを刀でなぐりつけ、容赦なく治療者に向かって切りつける。治療者は刀でなぐられたらひどく痛いので、大きなスポンジの板を楯にして身を守る。何度かやられたあと、治療者は反撃に転じた。Tをつかまえてかかえあげ、マットの上まで運んで行き、「ヤキトリにして食べちゃろゾ」とやきとりのタレをTの体中に塗り、表と裏を焼くまねをしてから、両手を使い、Tの体のあちこちをつかみ、その肉をむしり取るようにして食べるまねをした。Tはくすぐりたいがこの遊びが気に入ったようで、キョッキョッと笑っていた。

第15回

空気人形を抱いてロコビーの前に来る。人形にまたがり、「何しようかな？」と考えている様子。粘土でカニゲームの岩の出口をすべておおい、カニが出られないようにした。粘土にカニをくっつけてつかまえるのだと言う。そんなふうにしてカニゲームで遊んだあと、粘土をまとめて一つの大きな固まりにし、「ウンコだー」といいながら、人形のオシリにくっつける。そのウンコを治療者のオシリにももってきて、「キャーカクセンセイのオシリからウンコが出て来た、くさいー、大人のウンコでくさいんだよ」とおいを嗅ぐまねをする。ウンコをつかんで投げる。自動車にウンコを積んで運んだり、ウンコを車輪でひいたりする。最後に、「あー、おもしろかった」と本当にうれしそうにニコニコ笑って出て行った。Tの顔は爽快そのものだった。

第16回

刀で治療者を切る時、Tは、以前ほどムチクチキにはせず、手加減するようなどころがある。攻撃に迫力がない。治療者の痛みを察してか、あるいは治療者では相手不足で物足りないためか。それともTの攻撃欲求が満たされたためなのであろうか。いずれにしても、攻撃行動

に余欲がみられる。刀で切るのではなく、ナイフで治療者のズボンに汚すといった、形の違う攻撃性を示す。

第17回 「……」

スポンジの板で大きな家をつくり、その中に入って遊ぶ。家をつくる表情が生き生きして、遊ぶことの喜びを表現している。周囲の壁、屋根を組み立て、出来上がると自分が中に入り、「窓をぶさいでくれ」と治療者にたのむ。治療者がスポンジ板で窓をぶさぐと、中に入っていたTはしばらく静かにジッとして、自分の作った家の内部をあちこち眺めている。そして、出て来て屋根をなおしたり、壁をきっちりつけたりしてから、また中に入る。そういうことを何度も繰り返す。「お家の中で遊ぶおもちゃがある」といって、トロッカーからタマゴつりゲームとピストルをもって入り、しばらく遊んでから、「電気をつける」と出てきた。釣糸の先にピストルをぶら下げて、それを屋根から下げるように工夫する。家の中にぶら下げられたピストルの引き金を引くと、火花が散り明るくなるのを「電気」にみたてたのである。治療者に「センセイのお家もつくったら？」というので、Tの家を横に、大きな積木を積んで家をつくり、Tの家と行き来が出来るようにした。

……

……終了時刻がきておしまいにする時、Tは、ピストルを屋根に向かって突き上げ、屋根をぶちこわしながら、「バダーン」といった格好で出て来た。表情がのびのびして子供らしい。

第18回～19回 「……」

前回と同じように、スポンジの板で家をつくり、丸い窓から出たり入ったりして遊ぶ。この遊びがなかなか気に入ったらしく、話もせずせせせと考えながらつくっている。

……

……今日は、スポンジ板で小さい四角の箱をつくり、その中におもちゃを入れて家の中に持ち込んだり、スポンジのイスをつくらたりで、発展した造形が遊びの中に示されていた。

……今日の家は2階建てで、2階にバルコニーらしき部分をつくる。2階の部屋には、男女の人形が並んでかわいらしくちょこんと座っている。

しばらくすると、Tは、おもちゃを入れるためにつくったスポンジの箱に、何かを入れるために、治療者に「目をつぶっていて」と言い、その間に一生懸命になって箱の中に何かおもちゃをつめこんで蓋をした。「もういいよ」と言うので目を開けると、Tは、「何を入れたと思う?」とニコニコしながら治療者にきく。何だろうと考えながら、治療者はいろいろな答えをずるが当た

ない。治療者が正解を言わないうちに、Tは、「これでいい」と言ってビー玉を箱から出してきた。それを持って窓から家の中に入って行った。家を持ち上げるようにしてTが立ち上がると、家が縦に立った。縦に高い長方形の箱みたいな家をエレベーターにみたてた。Tが立っても天井の高さが十分に余るほどに箱を高くして、「これはエレベーターなんだよ」といながら中に入っている。次に、半円形のスポンジ板を同じ色どうして組み合わせ、赤、青、緑、黄の円盤をつくる。その4色をデンジマンの色だと言いながら、体でリズムをとりながら円盤をもって箱に行き窓にはめ込んだ。そしてこんど、Tはデンジマンになったつもりで箱の中に立った。ジャンプして上に突き出ようとしたが、天井は突き破れない。急いでイスを運んで来てその上の上でジャンプし、天井を突き破り、周囲の壁もパンチとキックで壊した。

第20回(最終回) 「……」

……今回もスポンジの板で家をつくる。出たり入ったりしながら工夫をし、形を変えていく。クッキー・ワンちゃんが気に入ったらしく、何度もプラスチック製のクッキーを食べさせてから、「どうして自分で食べるの?」と不思議そうに治療者に尋ねる。治療者が実際に食べさせながらそのしぐみを説明すると、「フーン」とうなずく。その犬を引っ張って歩き回る。しばらくして、汽車に乗り、汽車の後部に犬のヒモを結びつける。治療者に汽車のヒモを引っ張って動かしてくれと言う。治療者が引っ張って汽車と犬が動き出すと、Tは汽車の上に腹ばいになりながら、後ろからついてくる犬を眺めている。途中、輪投げの輪をとってきてまた乗り、動いている汽車の上から輪投げをやる。この遊びが気に入ったらしく、長い間続けた。

……

……神経性習癖や粗暴な攻撃行動が消え、元気に通園しているので、治療は今回をもって終結した。

IV 考 察

Tの自慰は、引っ越しによる遊び友達喪失と、妹に対する母親の好意的な態度への反感と嫉妬が原因で起こったのではないかと、母親は述べている。確かに、妹への嫉妬が伏線としてあり、さらに大人でさえ緊張を伴う引っ越しがTの心に大きなダメージを与えたことは想像に難くない。4～5歳の頃というのは、母親からの心理的な離乳も進み、友達を強く求める時期である。ちょうどその時期に、仲よく遊んでいた仲間と別れ、慣れない土地で新しい友達を見つけなければならなかったことは、Tにとってとてもつらいことだったろう。

……

……自慰を主訴とする一連の神経性習癖は、引っ越しが直

接的な引き金であったが、しかし、その根柢は、家庭内の問題と深くからんでいるようであった。両親の堅実な生活信条に基づいた養育態度により、きっちりと枠づけられた日々の生活に、Tは息苦しさを覚えていたのではないが、たまには、友達と同じおもちゃが欲しい、友達が食べているガムやアメが食べたいと思ったであろう。しかし、Tの心にキラキラと輝くそのような子供らしい欲求は、理知的ともいえる「家庭の規律」の前に色を失っていた。元来、子どもの欲求や感情、行動は原始的で、身勝手で、生き生きしているものである。Tの場合には、それが十分に表現され、満足される前に、「抑圧者」としての「家庭の規律」に遭遇してしまった。そのために、母子関係を中心とする家庭の安らぎの中で獲得されるべき基本的信頼感を十分に持つことができなかつたと言える。Tは、「家庭の規律」というフィルターを通して与えられる色褪せた愛情ではなく、暖かく包み隠しのないストレートな愛情を母親から享受したかった。セラピーの第1回で発せられた幼児音は、「甘えたい」、「親身になって自分を受け入れてもらいたい」、Tの気持ちを表現するサインであったと思う。それとは異質で対照的な粗暴な言葉も、「自分のことを真剣に受けとめてもらえない」ことに対するTの抗議と怒りの表現だととれよう。粗暴な言葉や激しい攻撃行動には、自由とストレートな愛情をはばむ「抑圧者」としての家庭の規律と、その立案・執行者である親に対するTの反逆の意味がこめられている。セラピー第4回の床屋さん遊びの中で、「父親の人形に「こらしめてやる、オシリからヘビを入れてやる」と攻撃的であったこと、いやがるのに母親の人形の頭を丸坊主にしたこと、あるいは、第15回で粘土の固まりをウソコにみたく、「大人のウソコをうてくさいんだよ」とウソコをつかんで投げたり、車輪でひいたりした行為は、自由を奪って抑圧するだけで自分を受け入れてくれない「大人の世界」とくに両親を代表とする家庭に対するTの痛烈な批判と抵抗のあらわれである。Tは自分をとり囲むそのような世界に抵抗し、復讐するために、強い力が欲しかった。キングコングのようなゴリラやカメンライダーを「ヘー、強そう」とか「強いぞ」と感情をこめて讚美したのは、強い力にあこがれ、強い力を必要とするTにとっては当然のことであった。第6回～8回にかけて性的な表現や遊びが表出された。「ウツチ怪獣」や「ボシコロ怪獣」が活躍した。又、粘土怪獣のオナチンやオシリを突きさしたり、「ウソコ」、「シッコ」、「オナラ」などの言葉が多用される。このような遊びを好んでする傾向が子どもには一般にあるが、Tの場合、それが激しかった。性的な遊びの中に

は、人間が本来もっている本能的な衝動や欲求が表現される。Tは、自分をとりまく合理的で理知的な世界の中で、その世界に対抗する異質な力として、より原始的で力強い生命力にあふれた本能や衝動が欲しかったのであろう。Tの住む家庭にはそのような生々しい人間臭さが不足していたためである。

治療過程の前半において、Tは、その強い力や生命力をネガティブな方面に使っていた。つまり、激しい攻撃行動によって、周囲の世界を否定し、破壊し、分解していた。その行動を治療者に受けとめてもらうことによって、Tは、自己の内面にくすぶっていた受け入れられないことに対する不満や不安をはき出した。夏休み前に鎮静した攻撃性は、夏休み後に再発したが、第16回ころになると再び消え去った。そして、Tのエネルギーは、スポンジ板を結合し、家を建設するという肯定的、創造的な行為へと転換していき、問題行動の消失へとつながった。

自慰を主訴とする一連の神経性習癖と粗暴な攻撃行動は、そのあらわれ方において、一方は自己の身体へ、他方は外部の世界へと違ってはいるけれども、「ボクは、親にかわいがられていない、ほんとうには受け入れられてはいないのではないか」というTの不安とあせりから生じたものと言えよう。その二種類の問題行動のもの本質的な意味は同じで、一つの根から生えた二本の幹のようなもの、つまり、原因はいっしょだったと思われる。

ところで、遊戯療法と平行して行なわれた母親へのカウンセリングで、母親がTの内面について深く考え、Tとの接し方が以前よりも柔軟になり、情感をもつようになったこともTの問題行動の改善に幸いした。治療が進むと、母親は、今まで与えたこともなかったベロベロキャンディや買い求めた菓子を持って来所し、セラピーの終了後に与えたりするようになった。また「ミニカーはいくつもっていても子どもは欲しいのですね」といって買い与えたり、子どもの気持ちを受け入れる余裕ができ、子どもを体ごと受け入れるような態度に変わって行った。はじめにも述べたように、今回の事例のような場合、母親や周囲の大人の配慮や協力が効果的である。そのため、母親のカウンセリングを通じ、母親自身が子どもの扱い方について調整するよう導いていくことが大切である。

〔参考文献〕

- 高野清純「神経性習癖児 講座情緒障害児」第2巻、黎明書房、1973。
- 京都大学教育学部心理教育相談室「臨床心理事例研究 一京都大学教育学部心理教育相談室紀要—第2号、1975。